

家族の看病と店の運営の両立に 苦しみ乗り越えたからこそ今がある

有限会社旬彩菓たむら 代表取締役 田村康博氏

季節の移り変わりを知らせ、奥ゆかしくも美しい日本文化を伝える。そんな伝統的な和菓子から親しみやすい洋菓子まで、種類豊富な銘菓が揃う菓子店「旬彩菓たむら」。この9月に百貨店内に直営店をオープンさせるなど躍進著しい今、あえて苦しい時期を振り返りつつ、田村康博代表取締役に思いを語っていただきました。



■創業85年&法人化14年の歩み

当社は法人化からはわずか14年ですが、創業年は、私の父であり初代当主である田村頼康が、東京の大井森下町で和菓子店を開いた1930（昭和5）年にまで遡ります。これまで順調に歴史を重ねてきたように思われるかもしれませんが、私もやはり例外ではなく、数々のつらい出来事や苦しい時期を何とか乗り越えてきました。



■創業の思いを決して忘れぬこと

ついに娘の看病と店の経営との両立ができなくなり、私たち経営者夫婦がそんな状態では当然のことながら売上はガタ落ちです。私は元来、家庭と仕事を分けて考えるタイプでしたし、職人の出ですから何があっても仕事には集中できる性分でしたが、この時ばかりはうまくいきませんでした。苦肉の策として東京に修業に出していた息子を帰郷させ、くわえて、有り難いことに従業員やお客様の支えもあり少しずつ売上も戻りました。この頃の私を根底で支えたのが、創業の思いである「手作りの美味しいお菓子を大勢の方に食べていただきたい」であり、苦しくも「信念と叶えたい夢があれば、何があっても最後は踏み止まれる」と学んだ時期でもありました。

■病に倒れた娘の看病に追われる日々

商売を続ける限り、財政面で苦心せずに過ごせることなどないと思います。美味しい菓子をつくることは当然として、経営者としては常に従業員の生活を守らねばならない責任があるからです。でも、そうした経営面でのこと以前に、家族の問題に苦しんだ時期がありました。娘が病に倒れてから21歳の若さでこの世を去るまでの日々は、筆舌に尽くし難い程につらい出来事の連続でした。最愛の娘が大病を患ったことのショックは大きく、まずその現実を受け入れることの困難たるや想像を遥かに超えていました。また、現実問題として入院・退院・手術・再入院・再手術と、夫婦揃って娘の世話にかかりつきりになり営業に専念することが難しくなったのです。



■「忘己利他」の精神で毎日を生きる

娘を失ったショックは消せませんが、だからこそ、お客様・従業員・従業員を支えてくださるご家族への感謝の気持ちを新たに作るなど得られたこともあります。そして今、「感謝・希望・くよくよしない・健康・行動」の「かきくけこ」と仏教の教えのひとつ「忘己利他」の精神を胸に、1日1日を大切に感謝の心で生きています。「己を忘れて他を利す（伝教大師最澄）」自分のことは後にして、まずは他人に喜んでいただくこと。

「人は叶えたい夢がある限り何があっても前を見て頑張ろうと思えるものです」と、田村さん。悲しい記憶を含むご自身の足跡を辿り、今を冷静に見つめ、未来に目を向けながら丁寧に語ってくださった。その経験と知恵が詰まった言葉に、並々ならぬ重みと説得力を感じた。

田村康博氏（たむら・やすひろ）

有限会社旬彩菓たむら 代表取締役

東京都生まれ。1959（昭和34）年に長野県県町に「たむら菓子店」を開業。1977（昭和52）年に同市安茂里伊勢宮に移転。店舗改修・拡張等を経て、2000（平成12）年の「有限会社 旬彩菓たむら」設立と同時に代表取締役に就任。現在に至る。

